

# ラジオ体操・二〇二三

## 福島みゆき

夏のはじめ、ジュンちゃんが「今年も夏休みにラジオ体操をやりたい！」と言ってきた。ジュンちゃんは小学生の男の子二人のおとうさんである。

去年、私と二人でコロナのため中断していた夏休みのラジオ体操を再開した。組織や担当役職にまかせるより、有志が進めた方がうまくいくというのは、過去の経験で知っていた。私は悩んだ。このところ体調が悪く、歩くのもままならない状況が続いていた。私は不安だったが、「やろう！」と決断。倒れたときは倒れたときだ。大げさだが、そのくらいの覚悟だった。

決まったら事は速い。チラシの原稿は私が作った。ジュンちゃんの了解をとって集落の回覧で配布した。小学生二人のカットも入れた。過疎の地区でどのくらい参加者があるか自信はなかった。小学生は二人だけ。あとは大人次第だ。

かくして夏休みははじまった。大人は毎日十人前後集まった。やれやれ。わが集落としては多い方である。今年は夫が自治会長である。彼はいつも全面的に協力してくれた。

朝が苦手な私は、毎日とても辛かった。早く出勤する息子のために朝食を用意しておかなくてはならない。毎朝戦争のように慌ただしく忙しい思いをして、何とかラジオ体操の会場に駆けつけた。普段はやっと歩いてきたのに、速足でしっかり歩いた。わたしの不調は気持ちの問題だったのだろうか？

途中台風で二日ほど休んだが、なんとか八月三十一日の最後の日まで続けることができた。

自治会長の夫は、「助成金は出せない」と言うので、お大師さんのときにわが家のお地藏さんにいただいたお賽銭から、参加賞、皆勤賞を捻出した。豆柴のすずちゃんの分も用意した。小学生二人は去年よりふざけないで体操した。少しは成長したのかな？

最高に暑い夏休みだったが、私は達成感でいっぱいだった。ラジオ体操のおかげで元気になったような気がする。

